

# ナタリー・デセイ & フィリップ・カサール デュオ・リサイタル

*Natalie Dessay, soprano*  
&  
*Philippe Cassard, piano*  
*Duo Recital*

<Women's Words>

2022年11月9日(水) 19:00 開演  
東京オペラシティ コンサートホール

7:00 p.m., Wednesday, November 9, 2022 at Tokyo Opera City Concert Hall

主催：ジャパン・アーツ

共催：公益財団法人 東京オペラシティ文化財団

後援：在日フランス大使館／アンスティチュ・フランセ日本

協力：ソニー・ミュージックジャパン インターナショナル

25<sup>th</sup>  
Anniversary  
Tokyo Opera City  
Concert Hall Recital Hall



文化庁  
文化庁 子供文化芸術活動支援事業

## Program

モーツァルト台本作家のダ・ポンテは《フィガロの結婚》で女たちの素晴らしい人物像を創り上げました。伯爵夫人は寛大な心の持ち主ですが伯爵に騙され続けることはよしとしない女性。侍女のスザンナは知性と遊び心が、少女バルバリーナには率直さがあります。コンサート・アリア「どうしてあなたを忘れよう」は、モーツァルトと初演歌手ナンシー・ストレースとの恋愛模様を伝える一曲です。

自身を犠牲にする女性たち(シメース、メリザンド)、操られてしまうオペラのヒロインたち(パミーナ、マルグリット)、ジャン・コクトーの見事な詩による「モンテカルロの女」の賭け事の借金で自殺を余儀なくされる老嬢など、ナタリー・デセイの劇的な才能のもと、彼女たちのポートレートが、忘れられぬモザイク模様を作り上げます。

- モーツァルト  
MOZART
- 歌劇《フィガロの結婚》より「早くおいで、美しい喜びよ」スザンナのレチタティーヴォとアリア  
Le nozze di Figaro, « Giunse alfin il momento~ Deh vieni non tardar » (Susanna's aria)
- 歌劇《フィガロの結婚》より「失くしてしまった、どうしよう」バルバリーナのカヴァティーナ  
Le nozze di Figaro, « L'ho perduta me meschina » (Barbarina's cavatina)
- コンサート・アリア「どうしてあなたを忘れよう～恐れることはないわ、いとしいひと」  
Concert aria « Ch'io mi scordi di te »
- 歌劇《フィガロの結婚》より「愛の神よ、照覧あれ」伯爵夫人のアリア  
Le nozze di Figaro, « Porgi, amor » (Contessa's aria)
- 歌劇《フィガロの結婚》より「美しい思い出よ、どこへ」伯爵夫人のアリア  
Le nozze di Figaro, « Dove sono » (Contessa's aria)
- 歌劇《魔笛》より「愛の喜びは露と消え」パミーナのアリア  
Die Zauberflöte, « Ach, ich fühl's » (Pamina's aria)

- ショーソン  
CHAUSSON
- 歌曲「終わりなき歌」  
La Chanson perpétuelle
- プーランク  
POULENC
- 歌曲「モンテカルロの女」  
La Dame de Monte Carlo
- ドビュッシー  
DEBUSSY
- 歌劇《ペレアスとメリザンド》より「私の長い髪が」メリザンドのソロ  
Pelléas et Mélisande, « Mes longs cheveux » (Mélisande)
- マスネ  
MASSENET
- エレジー (ピアノ・ソロ)  
Élégie, for piano
- 歌劇《ル・シッド》より「泣け、泣け、わが目」シメースのアリア  
Le Cid, « Pleurez mes yeux » (Chimène's aria)
- グノー  
GOUNOD
- 歌劇《ファウスト》より「なんと美しいこの姿(宝石の歌)」マルグリットのアリア  
Faust, « Ah, je ris de me voir si belle » (Marguerite's aria)

ナタリー・デセイ&フィリップ・カサール 2022年日本公演スケジュール

11/6 (日) <名古屋> 愛知県芸術劇場コンサートホール 主催：中京テレビ

11/9 (水) <東京> 東京オペラシティ コンサートホール 主催：ジャパン・アーツ 共催：公益財団法人 東京オペラシティ文化財団

\* 客席内での写真撮影および録音は禁止されております。  
The photographing or sound recording of this concert or possession of any device for such photography or sound recording is prohibited.



©Simon Fowler

**ナタリー・デセイ (ソプラノ)**

**Natalie Dessay, Soprano**

リヨン生まれ。ボルドー国立音楽院で学ぶ。通常5年間の過程をわずか1年で修了し、20歳のときに首席で卒業した。レパートリーは、モーツァルト《魔笛》夜の女王、パミーナやR.シュトラウス《ナクソス島のアリアドネ》ツェルビネッタ、《ばらの騎士》ゾフィー、《ジュリオ・チェーザレ》クレオパトラなどの他、フランス・オペラでは、《ハムレット》オフィーリア、《ホフマン物語》オランピア、《ロメオとジュリエット》ジュリエット、《マノン》、《ラクメ》などを演じてきた。

また、《夢遊病の女》、《ランメルモールのルチア》などのベルカントのレパートリーや、ローラン・ベリー演出《連隊の娘》マリー、《椿姫》ヴィオレッタでも大成功を収めている。

これまでに、ウィーン国立歌劇場、ニューヨークのメトロポリタン歌劇場、ミラノ・スカラ座、バルセロナのリセウ大劇場、ロンドンのロイヤル・オペラハウス、パリ国立歌劇場など、世界の名だたる歌劇場で定期的に出演し、名声を広める。ウィーン国立歌劇場では、“宮廷歌手”の称号を授与されている。

歌曲の分野でも活躍しており、ミシェル・ルグランとの共演や、フィリップ・カサールとは2012年以来、世界の著名なホールで60公演以上のコンサートを行っている。また、CD、DVDも数多くリリースし、多数の賞を受賞している。

近年は、活躍の場を広げて演劇にも出演しており、トゥールのオランピア劇場におけるハワード・ベイカーの「Und」でデビューを飾り大好評を博した。2018年にはアヴィニョン演劇祭に登場、また、モンパルナス劇場でシュテファン・ツヴァイク作品の「La Légende d'une vie(ある人生の伝説)」に出演した。

Natalie Dessay appears by arrangement with Les Grandes Voix/Céleste Productions.  
Ms Dessay records exclusively for Sony Classical.



©Jean-Baptiste Millot

**フィリップ・カサール (ピアノ)**

**Philippe Cassard, Piano**

1985年、パリでのクリスタル・ルトヴィヒとのジョイント・リサイタルを行って以来、フィリップ・カサールは協奏曲のソリスト、リサイタルの演奏者、室内楽の奏者として国際的な名声を確立している。1988年にはダブリン国際ピアノ・コンクールで1位に輝いた。

これまでにロンドン・フィルハーモニック、バーミンガム市交響楽団、BBCフィルハーモニック、BBCウェールズ、フランス国立管弦楽団等と協奏曲で共演。サー・ネヴィル・マリナー、ジェフリー・テイト、ロジャー・ノリントン、シャルル・デュトワ、マレク・ヤノフスキ、ウラディー・ミル・フェドセーエフなど多数の指揮者と共演している。

ドビュッシーのピアノ作品全曲演奏会(1日4回のリサイタル)を、ロンドン、ダブリン、パリ、リスボン、シドニー、バンクーバー、シンガポール、東京で開催し、大きな話題となった。また、中国、オーストラリア、南米、そしてカナダを定期的に訪れている。

室内楽でも膨大なレパートリーを誇り、ヴォルフガング・ホルツマイアー、ポール・メイエ、イザベル・ファウスト、そしてエベヌス、タカーチ等の弦楽四重奏団と共演を重ねている他、1999-2008年には「ブルジュ湖のロマンティックな夜」音楽祭の芸術監督を務めた。

2012年にはナタリー・デセイの専属ピアニストとなり、ヨーロッパ、北米の主要ホールで演奏を繰り返している。さらにデュオとしてドビュッシーの歌曲集2作品と、シューベルトの歌曲集を録音。最新CDリリースには、ディアパソン・ドール賞とショック・ドゥ・クラシカ賞を受賞した、ダヴィド・グリマル(ヴァイオリン)とアンヌ・ガスティネル(チェロ)とのベートーヴェン：三重奏曲、また、セドリック・ベシヤとの2台ピアノ版ベートーヴェン(リスト編)：交響曲第9番“合唱”がある。



## Program Notes

岸 純信(オペラ研究家)

モーツァルト (1756-1791)

歌劇《フィガロの結婚》より「とうとう嬉しい時がきた～早くおいで、美しい喜びよ」(スザンナのレチタティーヴォとアリア)  
「失くしてしまった、どうしよう」(バルバリーナのカヴァティーナ)

ヴォルフガング・アマデウス・モーツァルト(1756-91)が、作曲家として最も欲しかったのは「歌劇場での成功」であった。宮廷と結びつく道徳的なオペラ・セリア(正歌劇)でも、市民層に訴えかけるオペラ・ブッフア(イタリア語の喜劇オペラ)でも、彼は傑作を多く残している。

その中で最も知られるのが、ウィーンで1786年に初演のオペラ・ブッフア《フィガロの結婚》全4幕である。仏人ボーマルシェの原作戯曲の反骨精神が、台本作者ロレンツォ・ダ・ポンテに見事に受け継がれ、「横暴な伯爵に、従僕フィガロが立ち向かう」本作が成立。3年後に勃発するフランス革命を予見するオペラにもなった。

今回、デセイがまず歌うのは、第4幕で侍女スザンナが歌うレチタティーヴォ(朗唱)とアリア。伯爵の色好みを懲らしめるべく、夜の庭で伯爵夫人と衣裳を取り換えた彼女は、誤解した婚約者のフィガロが立ち聞きしていると気づいたうえで「(本当に私が待つのは)愛するその人。早く来てね」とこの曲を歌う。朗唱部での伴奏のトリルは喜びに震える胸の内を表し、アリアのゆったりした運び(アンダンテ)は心の落ち着きを表現する。

続いて、同じ第4幕で少女バルバリーナが歌う短いカヴァティーナを。使いの証拠に、手紙に封をしたピンを持ち帰るところ、彼女はそれを落としてしまい、暗がりでも懸命に探しながらこの曲を歌う。「モーツァルトの最も寂しげなメロディ」と呼ばれる一曲だが、こまっしゃくれた娘の人間像を膨らませる役目も果たしている。なお、このバルバリーナは《フィガロの結婚》でデセイが実際に演じた役柄だそう。細やかな表現力を楽しんでいただこう。

### コンサート・アリア「どうしてあなたを忘れよう～恐れることはないわ、いとしいひと」

このアリア(K505)は、上記のスザンナ役初演者、ナンシー・ストレスのために書かれたもの(初演:1787、ウィーン)。テキストは、モーツァルトのオペラ・セリア《イドメネオ》の改訂版作成時(1786)につくられた「追加のアリア(K490)」に準じるが、一部は異なっている。なお、この2曲の詩作者については、ロレンツォ・ダ・ポンテとする説があるが異論も多い。メロディにはメリスマ(歌詞の一音節に多数の音符を宛がう装飾的技法)が多く、デセイの美質が映える一曲でもある。

なお、本作は、管弦楽の伴奏にピアノの華麗なオブリガートが加わる点を特徴とするが、本日はもちろんカサールがそれを独りで担当。デセイの滑らかな声音にピアノの音が優美に寄り添うさまにも耳を敬っていただきたい。

歌劇《フィガロの結婚》より「愛の神よ、安らぎを与えたまえ(愛の神よ、照覧あれ)」(伯爵夫人のアリア)

《フィガロの結婚》第2幕の冒頭で伯爵夫人が歌う登場のアリア(カヴァティーナ)。夫の心が離れている現状を、伯爵夫人は独り嘆き、この名アリアを歌う。テンポは穏やかなラルゲットで貫かれ、愛の神におずおずと夫人は祈るが、その胸の内は、最後の一言で「死 morir」で締め括るといふ深刻なもの。デセイの精妙な息遣いから、貴婦人のたおやかさと深い悲しみを聴きとっていただこう。

歌劇《フィガロの結婚》より「美しい思い出よ、どこへ」(伯爵夫人のアリア)

こちらは、第3幕の中盤で伯爵夫人が歌うレチタティーヴォとアリア。裏切る夫を諫めるべく、はかりごと(先述のスザンナのアリアにもあった『ドレスの取り換え』)を考える夫人は、上手くゆくようにと祈りながら、復讐心ではなく「夫の心を取り戻せれば」とひたすら願う。アリア本編の構成は2部に分かれ、過去の幸せに思いを馳せる前半(アンダンティーノ)と、自分の揺らがぬ愛情が夫に届けばと願う後半(アレグロ)が、テンポの面でも曲調でも、良いコントラストを成している。

## Program Notes

歌劇《魔笛》より「ああ、私はそれを感じる(愛の喜びは露と消え)」(パミーナのアリア)

モーツァルトの母語、ドイツ語による《魔笛》全2幕(1791、ウィーン)は、セリフ入りの歌芝居(ジングシュピール)に属するオペラ。多能の人エマヌエル・シカネーダー(台本作者。初演ではパパゲーノの役も創唱)との良き友情が、作曲者の心に大きな灯りをともした傑作である。物語の細部には秘密結社フリーメイソンの教義と符合する点が多いが、王女パミーナが歌うこのアリア(第2幕)も、僧侶たちに「沈黙の掟」を強いられる王子タミーノを前に、状況を理解できない彼女が、彼の変貌ぶりに思わず涙ぐむさまを描いている。伴奏部が慄くように刻むリズムのもと、歌声が心情を切々と表現するさまに聴き入っていただきたい。

ショーソン (1855-1899)

歌曲「終わりなき歌」

交通事故で急逝したエルネスト・ショーソン(1855-99)が、死の前年(1898)に書いた「終わりなき歌」は、終わった愛を悲しみ、追憶に浸るも、最後には身投げせんとする女性の想いを、抑えた調子で伝える歌曲。詩人ながら理系にも強く、蓄音機の発明でエジソンと競ったともいうシャルル・クロ(苗字のCrosは、仏語固有名詞発音事典に拠るとsを発音しない)の詩に基く。デセイのようなソプラノ・リリコ・レジュエロ(抒情的で軽やかな声音を持つソプラノ)が歌う機会はさほど多くない曲だけに、彼女の息遣いの繊細さに耳を敬っていただこう。

ブーランク (1899-1963)

歌曲「モンテカルロの女」(詩:ジャン・コクトー)

本作は一般的に歌曲とみなされるが、楽譜は「ソプラノとオーケストラのためのモノローグ」と銘打ち、「ミニ・オペラもしくはモノ・オペラ(独りで歌い続けるオペラ)」と捉える向きも多い。歌詞は、著名なジャン・コクトーが、仏語の上手くない外国人歌手の発音練習用に書いた「Chanson Parlée 語るシャンソン」であるが、その内容——人生最後の日をカジノとホテルで過ごす年かきの女性の独白——に心動かされたフランシス・ブーランク(1899-1963)が、湿っぽくなり過ぎない旋律で楽曲化。1961年11月にモンテカルロその地で世界初演が成された。デセイならではの「ストレートな歌い直し」をお楽しみに。

ドビュッシー (1862-1918)

歌劇《ペレアスとメリザンド》より「私の長い髪が」(メリザンドのソロ)

クロード・ドビュッシー(1862-1918)が生涯で完成させたオペラはただ1作。それが、文豪メーテルランクの戯曲に基く歌劇《ペレアスとメリザンド》(1902、パリ)である。劇中では、王子ゴローが謎の女メリザンドを妻とするも、彼女は夫の異父弟ペレアスと心を通わせ、兄は弟を刺す。しかし、最後には静かな後奏がすべてを浄化。「何があっても、人間は生きてゆかねばならない」というメッセージが客席を包んで幕となる。

この曲は第3幕第1場で歌われ、短いですが、全編で最も旋律色に富むくだりである。メリザンドの髪は階上の窓から地面に届く長さ。曲中で聖人の名を呼ぶので祈りの歌のようにも聴こえるが、本質的には、人の心を引き付け惑わす女性の「妖しさ」を描いている。

マスネ (1842-1912)  
エレジー (ピアノ・ソロ)

耽美的なメロディとドラマを瞬時に盛り上げる技を駆使したジュール・マスネ(1842-1912)。多くのヒット作を生んだ作曲家だが、オペラ以外でことに名高い一作といえば、この曲になるだろう。本作はもとも、1866年作曲のピアノ曲集《10の形式の小品》の第5曲〈Mélodie メロディ〉であるが、後にルイ・ガレの詩がついて〈エレジー(悲歌)〉と題する歌曲になり、チェロ曲にもアレンジされた。今回は名手カサールならではの淡々とした独奏により、旋律の感傷的な味わいに浸っていただく。

マスネ (1842-1912)  
歌劇《ル・シッド》より「泣け、泣け、わが目」(シメヌスのアリア)

19世紀のパリ・オペラ座を賑わせたgrantオペラ様式(Grand Opéra)は、地方色とスペクタクルを盛り込み、独立のバレエ場面を持ち、全編を仏語で歌い通す5幕もしくは4幕立ての構造を採るが、その挿尾を飾る大作が、マスネの全4幕の歌劇《ル・シッド》(初演:1885)である。

台本はアドルフ・デズリ、ルイ・ガレ及びエドゥアール・プロの共作だが、原作は勿論、17世紀のコルネイユの筆、スペイン救国の英雄を描く同名の古典悲劇(1637年初演)である。このソロは第3幕で歌われるもの。ヒロインのシメヌスが、恋人ロドリゲと、彼の刃に斃れた父親の双方を想って嘆くアリアであり、タイトルの〈Pleurez, pleurez mes yeux〉は原作戯曲とも共通する一行である。

ちなみに、シメヌスの役はドラマティック・ソプラノ(楽譜ではSoprano dramatique)が歌うもの。しかし、今回のデセイは、自分の声で新境地を拓こうと考えたよう。彼女のフレージングのすべてにご注目を。

グノー (1818-1893)  
歌劇《ファウスト》より「なんと美しいこの姿(宝石の歌)」(マルグリートのアリア)

シャルル・グノー(1818-93)は「聖と俗の間でもがいた作曲家」。神父になろうと夢見つつも、実生活では、不倫相手から監禁まがいの扱いを受けました。しかし、そうした矛盾も抱えたからか、人一倍「聖なるもの」への憧れは強く、ドイツの文豪ゲーテの同名戯曲に基く歌劇《ファウスト》全5幕(初演:1859、パリ)も、その表れである。先輩ベルリオーズが、同じ題材の《ファウストの劫罰》(初演:1846、パリ)で「神の存在を通じて悪魔を描いた」のに対し、グノーは、台本作家の二人、ジュール・バルビエとミシェル・カレの協力を得て、「悪魔の存在を通じて神を表現」すべく腐心した。

この曲は、若返ったファウスト博士と恋仲になるマルグリートが、贈り物の宝飾品を身に付けながら、鏡に映る自分に魅せられるという第3幕の名場面。曲中では、長く続くトリルが心の震えを映し出す。デセイのしなやかな歌いぶりから「燃える乙女心」を聴きとっていただく。

## 歌詞対訳

Wolfgang Amadeus MOZART :

ヴォルフガング・アマデウス・モーツァルト :

Le nozze di Figaro,  
« Giunse alfin il momento »

歌劇《フィガロの結婚》より  
「早くおいで、美しい喜びよ」

Susanna  
Giunse alfin il momento,  
che godrò senza affanno  
in braccio all'idol mio! Timide cure!  
Uscite dal miopetto,  
a turbar non venite il mio diletto!  
Oh come par che all'amoroso foco  
l'amenità del loco, la terra e il ciel risponda,  
come la notte i furti miei seconda!  
Deh, vieni, non tardar, o gioia bella,  
vieni ove amore per goder t'appella,  
finché non splende in ciel notturna face;  
finché l'aria è ancor bruna, e il mondo tace.  
Qui mormora il ruscel, qui scherza l'aura,  
che col dolce sussurro il cor ristaura,  
qui ridono i fioretti e l'erba è fresca,  
ai piaceri d'amor qui tutto adescia.  
Vieni, ben mio, tra queste piante ascose.  
Vieni! vieni! Ti vo' la fronte incoronar di rose!  
(Text by Lorenzo da Ponte)

スザンナ  
とうとうその時がきたわ、  
憂いなく喜びを味わうの、  
我が憧れの君の腕の中で! 物怖じなんて、  
私の胸から出ておいき、  
私の喜びに水を差さないで!  
おお、愛の炎に、  
快いこの場所、天と地もが応えてくれ、  
夜も私の密かな企みを後押ししているかのよう!  
早くおいで、美しい喜びよ  
愛があなたを愉悅へといざなう所へ、  
まだ夜空に明かりがともらぬうちに、  
まだ空気はほの暗く、世界が静まり返っているうちに。  
ここでは小川がさらさら流れ、そよ風が戯れ、  
甘いささやきで心は爽やかに、  
ここでは花たちが笑い、草はみずみずしく、  
何もかもが恋の悦びへと誘っているわ。  
おいで、私の愛する人、この隠れた木立へ。  
おいで、おいで! あなたの額を薔薇の冠で飾ってあげる!  
(台本:ロレンツォ・ダ・ポンテ 訳:市浦純子)

Le nozze di Figaro,  
« L'ho perduta, me meschina »

歌劇《フィガロの結婚》より  
「失くしてしまった、どうしよう」

Barbarina  
L'ho perduta, me meschina!  
Ah chi sa dove sarà?  
Non la trovo. L'ho perduta!  
Meschinella! ecc.  
E mia cugina? E il padron,  
cosa dirà?  
(Text by Lorenzo da Ponte)

バルバリーナ  
失くしてしまった、どうしよう!  
ああ、どこにいったの?  
見つからない、失くしてしまった!  
困ったわ!  
従妹は? 旦那様は、  
なんていうかしら?  
(台本:ロレンツォ・ダ・ポンテ 訳:市浦純子)

Concert aria  
« Ch'io mi scordi di te »

コンサート・アリア  
「どうしてあなたを忘れよう〜恐れることはないわ、いとしいひと」

Ch'io mi scordi di te?  
Che a lui mi doni puoi consigliarmi?  
E puoi voler che in vita...  
Ah no! Sarebbe il viver mio di morte assai peggior.  
Venga la morte, intrepida l'attendo.  
Ma, ch'io possa struggermi ad altra face,  
ad altr'oggetto donar gl'affetti miei, come tentarlo?  
Ah, di dolor morrei!

どうしてあなたを忘れよう?  
あの人にこの身を任せよと?  
なおも生きよと...?  
ああ、だめよ! 死よりもはるかに悲惨な生になる!  
死よ来るがいい、恐れずに待ちましよう。  
でも、他の恋の炎に身を焦がすなんて、  
他の誰かに愛情を注ぐなんて、私にどうしてできましよう?  
ああ、苦しみで死んでしまえよう!



Non temer, amato bene,  
per te sempre il cor sarà.  
Più non reggo a tante pene,  
l'alma mia mancando va.  
Tu sospiri? O duol funesto!  
Pensa almen, che istante è questo!  
Non mi posso, oh Dio! spiegar.  
Stelle barbare, stelle spietate,  
perchè mai tanto rigor?  
Alme belle, che vedete  
le mie pene in tal momento,  
dite voi, s'egual tormento  
può soffrir un fido cor?

(Text by Giambattista Varesco)

### Le nozze di Figaro, « Porgi, amor »

**Contessa**  
Porgi, amor, qualche ristoro,  
al mio duolo, a' miei sospiri!  
O mi rendi il mio tesoro,  
o mi lascia almen morir!  
Porgi, amor, ecc.

(Text by Lorenzo da Ponte)

### Le nozze di Figaro, « Dove sono »

**Contessa**  
Dove sono i bei momenti  
di dolcezza e di piacer,  
dove andaron i giuramenti  
di quel labbro menzogner!  
Perché mai, se in pianti e in pene  
per me tutto si cangiò,  
la memoria di quel bene  
dal mio sen non trapassò?  
Dove sono i bei momenti, ecc.  
Ah! Se almen la mia costanza  
nel languire amando ognor  
mi portasse una speranza  
di cangiar l'ingrato cor!  
Ah! Se almen la mia costanza, ecc.

(Text by Lorenzo da Ponte)

### Die Zauberflöte, « Ach, ich fühl's »

**Pamina**  
Ach, ich fühl's, es ist verschwunden!  
ewig hin der Liebe Glück! –  
Nimmer kommt ihr Wonnestunden  
meinem Herzen mehr zurück!

恐れることはないわ、いとしいひと  
私の心はずっとあなたのもの。  
もうこれ以上耐えられない、こんな苦痛には、  
魂が抜けてしまいそう。  
あなたため息をついているの?なんと痛ましい苦悩だこと!  
考えてもみて、今のこの瞬間がどんなものか!  
ああ神さま、うまく言えないわ。  
野蛮な星よ、無慈悲な星よ、  
どうしてそんなに過酷なの?  
善良な魂たちよ、  
今の私の苦しみを見ていて、  
誠実な心がこれほどの責め苦し  
耐えられると思われませんか?

(詩:ジャンバティスタ・ヴァレスコ 訳:市浦純子)

### 歌劇《フィガロの結婚》より 「愛の神よ、照覧あれ」

**伯爵夫人**  
愛の神よ、安らぎを与えたまえ、  
私の悲しみに、私の嘆きに。  
私の大切な人をお返してください  
さもなくばせめて死を。  
愛の神よ、お願い…

(台本:ロレンツォ・ダ・ポンテ 訳:市浦純子)

### 歌劇《フィガロの結婚》より 「美しい思い出よ、どこへ」

**伯爵夫人**  
美しい思い出よ、どこへ、  
甘く楽しかった時間は、  
あの嘘つきな唇の  
誓いはどこへ消えたの?  
どうして、すべてが涙と痛みに  
変わってしまったときに、  
あの幸せの記憶も  
胸から消え去ってくれなかったの?  
あの美しい思い出はどこへ?  
ああ!せめて私の変わらぬ真心が、  
打ちひしがれながらも愛し続ければ、  
希望は消えないわ、  
あの不義理の心も変わるはず  
ああ!せめて私の変わらぬ真心…

(台本:ロレンツォ・ダ・ポンテ 訳:市浦純子)

### 歌劇《魔笛》より 「愛の喜びは露と消え」

**パミーナ**  
ああ、私は感じる、露と消えてしまったと!  
永遠に愛の喜びは!  
もう二度と、お前たち、限りなく幸せな時は  
私の心に戻って来ない!

Sieh Taminol! diese Tränen  
fließen, Trauter, dir allein,  
fühlst du nicht der Liebe Sehnen  
so wird Ruh' im Tode sein!

(Text by Emanuel Schikaneder)

### Ernest CHAUSSON : La Chanson perpétuelle

Bois frissonnants, ciel étoilé,  
Mon bien-aimé s'en est allé,  
Emportant mon cœur désolé !

Vents, que vos plaintives rumeurs,  
Que vos chants, rossignols charmeurs,  
Aillent lui dire que je meurs !

Le premier soir qu'il vint ici  
Mon âme fut à sa merci.  
De fierté je n'eus plus souci.

Mes regards étaient pleins d'aveux.  
Il me prit dans ses bras nerveux  
Et me baisa près des cheveux.

J'en eus un grand frémissement ;  
Et puis, je ne sais plus comment  
Il est devenu mon amant.

Et, bien qu'il me fût inconnu,  
Je l'ai pressé sur mon sein nu  
Quand dans ma chambre il est venu.

Je lui disais : « Tu m'aimeras  
Aussi longtemps que tu pourras ! »  
Je ne dormais bien qu'en ses bras.

Mais lui, sentant son cœur éteint,  
S'en est allé l'autre matin,  
Sans moi, dans un pays lointain.

Puisque je n'ai plus mon ami,  
Je mourrai dans l'étang, parmi  
Les fleurs, sous le flot endormi.

Au bruit du feuillage et des eaux,  
Je dirai ma peine aux oiseaux  
Et j'écarterai les roseaux.

Sur le bord arrêtée, au vent  
Je dirai son nom, en rêvant  
Que là je l'attendis souvent.

Et comme en un linceul doré,

見てタミーノ! この涙は  
流れているの、愛しい人、あなたのためだけに、  
あなたが愛の憧れを感じてくれないなら  
安らぎは死のうちに見出されることでしょう!

(台本:エマヌエル・シカネーター 訳:岩下久美子)

### エルネスト・ショーソン : 終わりのなき歌 op.37

ざわめく森よ、星空よ、  
愛しい人は、去っていった。  
悲しむ私の心を連れて。

切なくささやく風よ、  
甘く歌ううぐいすよ、  
あの人に、私が逝くことを告げておくれ。

あの人と出会ったその晩に、  
心奪われて、  
プライドなんかどこへやら。

熱いまなざしを送る私を、  
あの人はたくましい腕に抱きすくめ、  
髪もとにキスしてくれた。

体がじんと震えた。  
そして、いつのまにやら、  
あの人は、恋人になっていた。

見知らぬ人だけど、  
私の露わな胸に抱きしめた、  
私の寝室に現れたあの人を。

なるべくずっと、好きでいてね。  
そう言う私は、  
あの人の腕の中でしか、ぐっすり眠れなかった。

でも、気持ちが冷めたあの方は、  
ある朝、一人で、  
遠くへ旅立っていった。

恋人はもういない。  
だから、私は死のう。花咲く池の、  
穏やかな水面の下で。

葉ずれや水の音を聴きながら、  
鳥たちに悲しみを語ろう、  
そしてアジをかきわけていこう。

池のほとりについたら、風に向かって  
あの人を呼ぼう。ここであの人を  
よく待っていたことを思い出しながら。

そしてふりほどいた金色の髪を

Dans mes cheveux défaits, au gré  
Du vent je m'abandonnerai.

Les bonheurs passés verseront  
Leur douce lueur sur mon front ;  
Et les joncs verts m'enlanceront.

Et mon sein croira, frémissant  
Sous l'enlacement caressant,  
Subir l'étreinte de l'absent.

Que mon dernier souffle, emporté  
Dans les parfums du vent d'été,  
Soit un soupir de volupté !

Qu'il vole, papillon charmé  
Par l'attrait des roses de mai,  
Sur les lèvres du bien-aimé !

(Text by Charles Cros)

**Francis POULENC :  
La Dame de Monte Carlo**

Quand on est morte entre les mortes,  
Qu'on se traîne chez les vivants,  
Lorsque tout vous flanque à la porte  
Et la ferme d'un coup de vent,  
Ne plus être jeune et aimée...  
Derrière une porte fermée,  
Il reste de se fiche à l'eau  
Ou d'acheter un rigolo.  
Oui Messieurs, voilà ce qui reste  
Pour les lâches et les salauds.  
Mais si la frousse de ce geste  
S'attache à vous comme un grelot,  
Si l'on craint de s'ouvrir les veines,  
On peut toujours risquer la veine  
D'un voyage à Monte-Carlo.  
Monte-Carlo, Monte-Carlo.  
J'ai fini ma journée.  
Je veux dormir au fond de l'eau.  
De la Méditerranée.  
Après avoir vendu votre âme  
Et mis en gage des bijoux  
Que jamais plus on ne réclame,  
La roulette est un beau joujou.  
C'est joli de dire : « je joue ».  
Cela vous met le feu aux joues  
Et cela vous allume l'œil.  
Sous les jolis voiles de deuil  
On porte un joli nom de veuve.  
Un titre donne de l'orgueil !  
Et folle, et prête, et toute neuve,  
On prend sa carte au casino.

死に出の衣装に、  
私は風に向かって身を投げよう。

過ぎ去った幸せは、  
額にやさしい光を投げかけてくれるだろう。  
緑のい草は、私を抱き取ってくれるだろう。

優しく抱きしめられた  
私の震える胸は、いない人に  
抱きしめられたと思いきむだろう。

私の最後の息が運ばれて  
夏風の香りに混じり、  
快樂のため息となればいい！

飛んでいけ、蝶よ、  
五月のバラの魅力のとりことなり、  
愛する人の唇へと！

(詩:シャルル・クロ 訳:橋口久子)

**フランシス・プーランク :  
モンテカルロの女**

死者の中の死者となり  
生者の中を苦しげに歩む女  
誰からも追いやられ  
きつく扉を閉ざされたなら  
もはや若くもなければ、愛されることもない……  
閉ざされた扉の裏で  
できることといえば海に身を投げるか  
ピストルを買うことくらい  
ええ、みなさん、できるのはそれだけ  
臆病で卑劣な者たちにできるのはね  
でも、そんな振る舞いの恐ろしさが  
猫の首の鈴のようにつきまとうのなら  
自分の手首の血管を切るのが恐いのなら  
いつだって自分の運を天に任せればいい  
モンテカルロへの旅で  
モンテカルロ、モンテカルロ  
今日の仕事は終わった  
海の底で眠りたい  
地中海の底で  
あなたの魂を売り払い  
身を飾る品々を質に入れ  
どうせもう誰にも求められることもない品々  
そのあとはルーレットがお気に入りのおもちゃ  
「賭ける」というすてきな言葉  
それだけで頬が火に染まり  
片目に明かりが灯る  
すてきな喪服のベールの下に  
寡婦というすてきな名前  
肩書が誇りをくれる！  
頭がおかしくて、覚悟もできて、何も知らない女が  
カジノでカードを引く

Voyez mes plumes et mes voiles,  
Contemplez le strass de l'étoile  
Qui me mène à Monte-Carlo.  
La chance est femme.  
Elle est jalouse  
De ces veuvages solennels.  
Sans doute elle m'a cru l'épouse  
D'un véritable colonel.  
J'ai gagné, gagné sur le douze.  
Et puis les robes se décousent,  
La fourrure perd ses cheveux.  
On a beau répéter : « je veux »,  
Dès que la chance vous déteste,  
Dès que votre cœur est nerveux,  
Vous ne pouvez plus faire un geste,  
Pousser un sou sur le tableau  
Sans que la chance qui s'écarte  
Change les chiffres et les cartes  
Des tables de Monte-Carlo.  
Les voyous, les buses, les gales !  
Ils m'ont mise dehors... dehors...  
Et ils m'accusent d'être sale,  
De porter malheur dans leurs salles,  
Dans leurs sales salles en stuc.  
Moi qui aurais donné mon truc  
A l'œil, au prince, à la princesse,  
Au Duc de Westminster, au Duc,  
Parfaitement.  
Faut que ça cesse,  
Qu'ils me criaient, votre boulot !  
Votre boulot !...  
Ma découverte.  
J'en priverai les tables vertes.  
C'est bien fait pour Monte-Carlo.  
Monte-Carlo.  
Et maintenant, moi qui vous parle,  
Je n'avouerai pas les kilos  
Que j'ai perdus à Monte-Carlo,  
Monte-Carlo ou Monte-Carlo.  
Je suis une ombre de moi-même...  
Les martingales, les systèmes  
Et les croupiers qui ont le droit  
De taper de loin sur vos doigts  
Quand on peut faucher une mise.  
Et la pension ou l'on doit  
Et toujours la même chemise  
Que l'angoisse trempe dans l'eau.  
Ils peuvent courir.  
Pas si bête.  
Cette nuit je pique une tête  
Dans la mer de Monte-Carlo.  
Monte-Carlo.

(Text by Jean Cocteau)

この羽根飾りとベールがあるでしょう  
まがいもののお星さまをご覧なさい  
これが私をモンテカルロへ導いた  
幸運は女  
幸運は妬む  
まじめぶった寡婦ぐらしを  
だから、私を人妻だと思いきんだはず  
立派な大佐さまの妻だと  
私はそう、十二に賭けて勝った  
それから、どのドレスも裂け  
毛皮の毛がみんな抜けた  
意味もなく繰り返す、「もつと」と  
幸運に嫌われたらもう  
心が昂ぶったらもう  
指一本動かさず  
ボードにコインを押し出すこともできなくなる  
そう、幸運が去り  
数字やカードを変えてくれなくなるまで  
それがモンテカルロのテーブル  
ごろつき、まぬけ、悪たれども！  
私はやつらにけんもほろろに……叩き出され……  
汚らわしいと罵られ  
フロアの疫病神と罵られた  
やつらの白壁の汚いフロアで罵られた  
私はあれをあげるつもりだったのに  
目玉に、王子さまに、お姫さまに  
ウェストミンスター公爵に、公爵に  
それも完璧に  
もう終わりにしよう  
私をどなりつければいい、さあ、仕事だ、と  
仕事だ！と……  
私の発見のこと  
緑のテーブルからあれを奪ってやろう  
モンテカルロには当然の報いだ  
モンテカルロ  
そして今、あなたに話しかける  
重さのことは告げない  
モンテカルロで失った重さのことは  
モンテカルルだかモンテカルロだか  
私は私自身の影……  
どんな倍賭けもどんな手口も  
チップの集配係も当然のように  
遠くから人の手を叩く  
チップを刈り取れるようになったから  
それに年金か借金か  
それにいつも同じシャツ  
それも不安でびしょ濡れになったシャツ  
みんな走れはする  
それほどばかじゃない  
今夜、私は飛びこむ  
モンテカルロの海に  
モンテカルロ

(詩:ジャン・コクトー 訳:藤本優子)

Claude DEBUSSY :  
Pelléas et Mélisande,  
« Mes longs cheveux »

Mélisande  
Mes longs cheveux descendent jusqu'au seuil de la tour !  
Mes cheveux vous attendent tout le long de la tour !  
Et tout le long du jour !  
Et tout le long du jour !  
Saint Daniel et saint Michel,  
Saint Michel et saint Raphaël,  
Je suis née un dimanche,  
Un dimanche à midi !

(Text by Maurice Maeterlinck)

Jules MASSENET :  
Le Cid, « Pleurez mes yeux »

Chimène  
De cet affreux combat je sors l'âme brisée !  
Mais enfin je suis libre et je pourrai du moins  
Soupirer sans contrainte et souffrir sans témoins.

Pleurez ! pleurez mes yeux ! tombez triste rosée  
Qu'un rayon de soleil ne doit jamais tarir !  
S'il me reste un espoir, c'est de bientôt mourir !  
Pleurez mes yeux, pleurez toutes vos larmes !  
pleurez mes yeux !

Mais qui donc a voulu l'éternité des pleurs ?  
O chers ensevelis, trouvez-vous tant de charmes à  
léguer aux vivants d'implacables douleurs ?  
Hélas ! je me souviens, il me disait :  
Avec ton doux sourire...  
Tu ne saurais jamais conduire  
Qu'aux chemins glorieux ou qu'aux sentiers bénis !

Ah ! mon père ! Hélas !  
Pleurez ! pleurez mes yeux !  
Tombez triste rosée  
Qu'un rayon de soleil ne doit jamais tarir !  
Pleurez mes yeux !  
Ah ! pleurez toutes vos larmes ! pleurez mes yeux !  
Ah ! pleurez !  
De cet affreux combat... Pleurez mes yeux !  
(Text by Adolphe d'Ennery, Louis Gallet and Édouard Blau)

クロード・ドビュッシー :  
歌劇《ペレアスとメリザンド》より  
「私の長い髪が」

メリザンド  
私の長い髪が垂れ、塔の入口に届く！  
私の髪が塔の上から下まであなたを待ちわびる！  
一日の初めから終わりまで！  
一日の初めから終わりまで！  
聖ダニエルと聖ミカエルよ  
聖ミカエルと聖ラファエルよ  
私は日曜日に生まれた  
日曜日の正午に！

(詩:モーリス・メーテルランク 訳:藤本優子)

ジュール・マスネ :  
歌劇《ル・シッド》より「泣け、泣け、わが目」

シメーン  
あの恐ろしい争いで私が手にしたのは打ち砕かれた心！  
それでも私は自由になり、できることも増えた  
心から溜め息をつき、人知れず思い悩むことを

泣きなさい！ 泣きなさい、私の目よ！ 哀しみの露をしたらせて  
日の光を浴びても乾きもしない露を！  
私にまだ希望があるとすれば、それは時を待たずに死ぬこと！  
泣きなさい、私の目よ、あなたの涙をすべて注ぎなさい！  
泣きなさい、私の目よ！

でも、永遠の涙をいったい誰が望んだという？  
地に眠る大切な人々よ、あなたがたはどれほどたくさん苦しみ  
満ちた魔法を見出し、生ける者たちに伝えたの？  
ああ、忘れない、あなたは私に言った  
君のその甘い笑顔さえあれば……と  
君の進む先はほかにあるはずもなく  
栄光の大道か祝福された小道を行くはず、と！

ああ、お父さま、どうして！  
泣きなさい！ 泣きなさい、私の目よ！  
哀しみの露をしたらせて  
日の光を浴びても乾きもしない露を！  
泣きなさい、私の目よ！  
ああ！ すべての涙を流しつくしなさい！ 泣きなさい、私の目よ！  
ああ！ 泣きなさい！  
あの恐ろしい争いで……泣きなさい、私の目よ！  
(詩:アドルフ・デヌリ、ルイ・ガレ、エドゥアール・プロ  
訳:藤本優子)

Charles GOUNOD :  
Faust, « Ah, je ris de me voir si belle »

Marguerite  
Ah ! je ris de me voir,  
Si belle en ce miroir !  
Ah ! je ris de me voir,  
Si belle en ce miroir !  
Est-ce toi, Marguerite ?  
Réponds-moi, réponds-moi,  
Réponds, réponds, réponds vite !  
Non ! non ! – ce n'est plus toi !  
Non ! non ! – ce n'est plus ton visage !  
C'est la fille d'un roi,  
Qu'on salue au passage !  
Ah, s'il était ici ! ...  
S'il me voyait ainsi !  
Comme une demoiselle,  
Il me trouverait belle.  
Achevons la métamorphose !  
Il me tarde encor d'essayer  
Le bracelet et le collier !  
Dieu ! c'est comme une main qui sur mon bras se pose !  
Ah ! je ris de me voir  
Si belle en ce miroir !  
Est-ce toi, Marguerite ?  
Réponds-moi, réponds vite !  
Ah, s'il était ici ! ...  
S'il me voyait ainsi !  
Comme une demoiselle,  
Il me trouverait belle.  
Marguerite, ce n'est plus toi,  
Ce n'est plus ton visage,  
Non ! c'est la fille d'un roi,  
Qu'on salue au passage.

(Text by Jules Barbier and Michel Carré)

シャルル・グノー :  
歌劇《ファウスト》より「なんと美しいこの姿(宝石の歌)」

マルグリート  
何と美しいこの姿  
鏡に映る影よ  
何と美しいこの姿  
鏡に映る影よ  
あなたなの、マルグリート？  
さあ、早く教えて  
さあ、早く教えて  
違う、あなたじゃない  
違う、あなたとは別の顔  
すてきなお姫様  
誰もがお辞儀をしてくれそう  
ああ、あの人がここにいたら……  
この姿を見てくれたらいいのに  
気品にあふれた  
この美しさに驚くことでしょう  
すっかり変わってみせましょう  
そのときが待ち遠しい  
腕輪に首飾り  
ああ、まるで私の腕に触れる手のよう  
何と美しいこの姿  
鏡に映る影よ  
あなたなの、マルグリート？  
さあ、早く教えて  
ああ、あの人がここにいたら……  
この姿を見てくれたらいいのに  
気品にあふれた  
この美しさに驚くことでしょう  
マルグリート、あなたじゃない  
あなたとは別の顔  
どこかのすてきなお姫様  
誰もがお辞儀をしてくれそう  
(台本:ジュール・バルビエ、ミシェル・カレ 訳:藤本優子)